

筑波大学社会・国際学群国際総合学類
卒業論文

抗議する社会運動
—SEALDsは何を変えたか—

2018年1月

氏 名：藤木 耀
学籍番号：201310401
指導教員：関根久雄

目次

第1章 序論	1
1. 問題意識・問題設定	1
2. SEALDsの抗議運動を分析する手法の検討	2
(1) 社会運動に関する先行研究の整理	2
(2) 本稿が採用する手法	4
3. 研究方法と章構成	5
第2章 抗議する社会運動	6
1. 社会運動の定義	6
2. 社会運動の変遷	6
(1) 従来の社会運動から「新しい社会運動」へ	6
(2) お祭りデモと占拠デモの隆盛	7
第3章 SEALDsの抗議運動	9
1. 概況	9
(1) SASPLからSEALDs初期 抗議スタイルの模索	9
(2) SEALDsが抗議運動の受け皿の役割を果たした時期	10
(3) 選挙運動への移行から解散	11
2. SEALDsに対する言説	12
3. 政治局面に与えた影響	15
第4章 分析 SEALDsは何を変えたか	16
1. 民主主義を問う運動	16
2. 結節点としての多義的な機能	17
第5章 結論	19
1. SEALDsは現実の政治状況をどう変えたか	19
2. SEALDsは社会運動をどう変えたか	19
3. SEALDsは人びとをどう変えたか	20
注	21
参考文献	22

Summary25

謝辭26

第1章 序論

1. 問題意識・問題設定

2016年3月29日、「我が国及び国際社会の平和及び安全の確保に資するための自衛隊法等の一部を改正する法律（平成27年9月30日法律第76号）」通称、安全保障関連法が施行された。法案の成立過程で違憲性が強く懸念され、大きく議論は割れた。2015年8月30日に国会議事堂前に法案に抗議するために集まった人たちは主催者発表によれば12万人⁽¹⁾と推定され、同日に全国300以上の場所で抗議が展開された。

そのとき中心にいたのが同年5月より国会議事堂前を中心に抗議活動を展開していたSEALDs（Students Emergency Action for Liberal Democracy-s：自由と民主主義のための学生緊急行動、以下SEALDs）であり、その主張は同法案に反対する人びとを中心に共感を集め、抗議活動の広がりの方点として機能した。また、SEALDsが中心となった抗議運動では野党の政治家も実際に主張をし、政治局面を左右する場として大きな影響力を持った。

日本では、1970年代後半から低迷していた「抗議する運動」が1990年以降再び隆盛し、2012年の春から秋にかけて行われた、原子力発電の再稼働に反対する官邸前デモ〔野間 2012;伊藤 2012:118-125,220-224〕で「抗議する運動」は一つの極致に達する。また、のちにSEALDsを始めのメンバーたちはこのデモを見に行っており、「日本じゃないみたいな雰囲気」〔奥田 2016:82〕だとSEALDsの中心人物の一人である奥田は語っている。SEALDsの参加者には震災と原発事故後の社会変動の中で、顕著な意識の変化を自認する者が多く、彼らにインタビューを行った富永は「劇的でも危険でもない運動」に参加する若者が、抗議運動という「出来事」と日常のあいだで、彼らの共有する行動様式や趣向に基づき、シェアハウスでの生活や聴いている音楽など一見してもわからない政治性から地続きで抗議活動を行う様子を明らかにしている〔富永 2017〕。

政治的権力の外部に位置し、それをチェックする市民的公共圏への参入資格は財産と教養であり、地方在住者や経済的弱者、マイノリティは包摂されにくい現状が存在する〔ハーバーマス 1994〕。一方で、他者が他者として存在することを肯定し、関心を寄せながらも距離を縮めない態度から、別様の世界の開示という形の社会運動もありうる〔齊藤 2000:97〕。

一方で、SEALDsの抗議運動においては運動の是非自体にも言及が寄せられ、参加者はバッシン

グや誹謗中傷、攻撃的な画像の送付といういやがらせ〔田村 2016:238-243〕に加え、果てはメンバーへの殺害予告が発生した〔奥田 2016:227-229〕。

運動からは一歩ひいた日常のレベルにおいて、一部のメンバーは社会運動に「引く」または「避ける」友人や知人とある程度のコミュニケーションを実践し、他者が社会運動や政治的な話題から距離を置く動機や経緯を解釈した。そして、自分と他者を「自らとは異なるライフスタイルを持つ人々として捉え、異質なあり方をいかに調停するか」という点を組織の運営や抗議運動での振る舞いに反復させる〔富永 2017:190-209〕。SEALDsに参加した若者たちは、このような困難に直面しながらも、可能な限り運動の包括性とインパクトを強め、政治状況を変えようとした。

SEALDsの成果に対する言及は数多いが、その運動の内部で活動する若者たちを見てきた筆者にとって、その多くはSEALDsが抗議運動を起こした意図や、限られた時間と人的資源の中で下した判断を鑑みていない分析が多い。中心メンバーのあいだでは、運動の意義や自分たちが直面した状況を鑑みた上での評価をアカデミアに求め、富永や田村のインタビューにも協力した。

しかしながら、彼らの社会運動研究に関するアカデミアへの落胆は大きい。「社会運動のサブカルチャー化」とは、富永が構築した概念であり、活動家のこだわりやしきたりが、「違い」を細分化する中で志をともにする仲間同士が分かり合えなくなっていくこと、つまりサブに分化されていく様子を表現したものである²⁾が、SEALDsの参加者たちは「社会運動サブカルチャー」としての若者という一見してみると「他者との分かり合えなさの文脈」で表現されてしまった〔富永 2017:235-241〕。もちろんこの研究は分かり合えなさを表現することを通して、共約を模索する意図がある。

社会運動とは、集合的な利益を求めるための活動だが、人々は個人化、流動化の中で、自分だけでなく他人にも共通するような集合的な利益の存在を想定することが難しくなる。だからこそ運動に参加する人々は、自分の携わる運動が集合的な利益を獲得するものであることを説明する必要に迫られる。運動に従事する人々が、「若者」に限らずあるカテゴリーを援用しながら運動を行うということは、個人化された人々が、集合的な利益を獲得するという「社会運動」の意義を説明するという営みでもある。すでに出自や属性にもとづく同一性や同質性が自明でない社会において、「自分だけでなく、他人も同じ立場にある」「自分だけでなく、他人も同じ利益を求めている」という説明なくしては、社会運動は成立しない。自分たち、あるいは自分たち以外の他者をカテゴライズし、個人の背後に存在する集団を想定することは、現代の社会運動に不可欠なプロセスであるだろう〔富永 2017:247〕。

しかし、運動従事者としての観点からすれば、自分たちを他者として距離をおいて描写する分析よりは、自らの抗議運動の意義を表現する研究を望んでいた側面があると筆者は参与観察の経験から分析する。彼らは社会学の研究の手つきに落胆を覚えたのである。

本稿では既存の研究を参照した上で SEALDs に関係する人びとの側の論理を紹介し、間主観的に SEALDs の意義を位置づけ直した上で、この運動は何を変えたのかを明らかにする。SEALDs に対する文章や言論は数多いが、その大部分はある一面、たとえばその運動のスタイルを表層的に切り取っただけのものに過ぎず、社会運動論の知見や質的・量的な調査の上での学術的な水準に達した分析は富永や田村などほんの一握りにすぎない。次の項において SEALDs は何を変えたのか、複合的に明らかにするために先行研究を検討する。

現代においては個人がシステムから疎外され、ふいに苦境に立たされるという危険に満ちた社会に誰もが生きている。社会運動を研究する意義は、「社会運動そのものが社会変動を引き起こすからに他ならない」[富永 2016:29]。SEALDs の果たした意義を問い直すことは、社会変動を起こす人びとの営みを理解することにつながる。これから社会運動を行い周囲の人びとの軋轢や効果的な運動の模索という困難に直面する人びとに正当な評価を与えるためにも、運動主体と社会運動研究者の視点を総合した意義の検証が必須である。

2. SEALDs の抗議運動分析手法の検討

(1) 社会運動に関する先行研究の整理

この項では社会運動を研究する方法論がどのように変化してきたかについて記述する。社会運動という現象自体の変遷については主に第2章において論じるが、方法論の案出過程を説明するためにこの項で運動の変化についても一部論じる。また、SEALDs という個別の運動に関する研究の蓄積はここで紹介する。

社会運動の見方には経験運動論という文脈があり、富永は「社会運動と文化」[野宮 2002a,2002b]の議論を発展させ、社会運動を「フロントステージ」と「バックステージ」、「日常」と「出来事」に分けて考察する方法を考案し、北海道で行われた G8 サミット抗議運動の参加者や、SEALDs の若者たちはどのような立場に置かれながら運動を行っていたのかを記述している [富永 2016,2017]。

経験運動論は、「個人化・流動化の時代を生き、既に集合的アイデンティティによって定義されない人々が、社会運動の過程を共有することにより、自らとは異なる他者と経験を共有し、また経

験の差異を乗り越える試み」〔富永 2016:302〕として社会運動を捉えるが、「経験運動論は個々人の「経験」を重視する一方で、それが政治行動・社会運動であるがゆえに生じる、経験や体験の形式や様式に配慮してきたとはいいがたい。」〔富永 2016:302-303〕ということが富永の社会運動論に対する問題意識であり、それを踏まえて SEALDs を研究する際には社会運動従事者のこだわりやしきたりへの着目の重要性を強調する。

また、他の SEALDs に関連する研究としては田村貴紀と田村大有によって行われた Twitter 上での SEALDs に対するツイートを量的に分析したものが存在する。この手法をテキストマイニングというが、この調査により、自動ツイートや匿名アカウントによるレイシズムやセクシズムが SEALDs メンバーに投げつけられた状況を明らかにしている〔田村 2016:242〕。それに応じてメンバーたちはこのようなアカウントからのメッセージを自動でブロックするプログラムを SEALDs の公式アカウントをはじめ個々人も導入し、ネット上では対話的対応からエンジニアリング的対応にシフトした〔田村 2016:242〕。これは同世代と交流が容易であるネット空間において、SEALDs の参加者たちが距離を置いてしまう要因としても考察できる。

(2) 本稿が採用する手法

こうした経緯を踏まえ、本稿では、既存の社会運動研究と SEALDs 研究が明らかにした視座を考慮に入れた上で SEALDs の抗議運動を概観し、多様な立場の研究者や知識人からの SEALDs に対する考察を間主観的に位置づけ直す。

筆者は SEALDs が国会前抗議をはじめの前の全体ミーティングから、SEALDs のメンバーという自己認識を持ちつつ、運動に参加した。2013 年の 12 月 14 日、筆者はのちに SEALDs の中心メンバー数人が高円寺のライブハウスで主催したイベントで彼らと知り合って以降、徐々に増え続ける SEALDs に関係する人びとの輪に断続的に関わり、現在に至る。そのため、彼らと帯同することで得た経験や知識、知り得た言葉などは質的なデータとして適宜用いる。

加えて、SEALDs の研究蓄積として参照可能な富永と田村の行ったインタビューと分析〔富永 2017; 田村 2016〕は SEALDs に関係する人びとの先行研究として積極的に活用する。抗議運動やデモ、街宣といった現象に肉薄するために、社会運動やデモに関する先行研究を読解する。抗議運動中に行われたスピーチに関しては、ウェブ上のアーカイブや、文章化されているもの、SEALDs のドキュメンタリー映画に登場するものを分析の対象とする。

3. 研究方法と章構成

社会運動のあり方を分析することは、公共性を問うことを意味する場合が多い。本稿では、SEALDs の抗議運動の特質を論じる上で公共性論の主要な論点に踏み込む場合はその先行研究を可能な限り活用するが、それは必ずしも公共性論の文脈においてのみ SEALDs の社会運動を論じるということを意味しない。この本稿のスタンスは市民社会論の先行研究に対しても同様である。

第1章では、先行研究の整理を行う。社会運動は社会学のサブフィールドとして一定の研究の蓄積があるが、経験運動論、「社会運動と文化」論を発展させた SEALDs 研究を行った富永の視座に依りつつ、長期に渡る参与観察に基づく SEALDs 内の論理を総合するという筆者の立ち位置を示す。

第2章では 社会運動の定義、歴史、変遷をたどり、これまで存在した運動の性質から、抗議する社会運動という分析枠組みを規定する。SEALDs をいかに理解するかという前提の枠組みをここで整える。社会運動が編年的な影響のもとに姿を変える様子を明示し、国際的にも運動は相互に影響を与えあい、SEALDs の抗議運動スタイルとして表出していることを記述する。

第3章では SEALDs の社会運動の過程、特徴そして安全保障法制に対する抗議運動の中でどのような機能を果たしていたかについて論述する。ここでは便宜的に三つの時期を設け、その運動が変化・発展していく過程を示す。また、従来の研究では、SEALDs が現実の政治状況に与えた変化は論じられてこなかった。安全保障法案が可決した後、SEALDs が当時の政権に社会保障や富の再分配、そして安全保障の観点などで、その運動の性質を変えつつ、政治団体としての資格を取得し、選挙運動を行う様子を述べ、SEALDs がどのような社会的評価を受けてきたかを記載する。

第4章では抗議する社会運動の中で、コールアンドレスポンス、スピーチなど、デモという社会空間の中とで何が起き、その外側の社会にどのような影響を与えたのかを分析する。民主主義を問い、安全保障法制という 이슈の下多くのステークホルダーや抗議する市民の受け皿、結節点として SEALDs がどのように機能したかを示す。加えて、選挙運動においても、野党共闘という近年の国政の潮流がこの運動体に仕掛けられ、形成していったことを渋谷での街宣や参議院選挙での出来事から論じる。

そして結論の第5章では、第4章までの論述に考察を加え、SEALDs が何を変えたかを現実の政治状況、社会運動、そして人々をどう変えたかという三つの観点に分けて論じる。

第2章 抗議する社会運動

SEALDs がはじまるまで、日本では多くの社会運動が生じてきた。また、人びとは世界各地で行われる運動を相互に参照し、影響を与え合いながらそれぞれ独自の運動を行ってきた。SEALDs の運動が何を変えたか、SEALDs がどう新しかったのかを把握するために、それ以前に存在した社会運動の変遷を、SEALDs へ繋がるように記述する。

1. 社会運動の定義

ここでは「共通目標と社会的連帯に基づいた集合行動」として社会運動を定義する。近年は社会運動研究の俎上に載せられる領域は拡張しており、社会運動における「運動」とは、私たちの生活を形作っている諸々の習慣であり、そこには言語的習慣や家庭内での基本的習慣も含まれる〔クロスリー 2009:22〕が、この捉え方は富永とも共通しており、近年の社会運動論の前提となっている。

2. 社会運動の変遷

(1) 従来の社会運動から「新しい社会運動」へ

伊藤は社会運動を「求める運動」（または「抗議する運動」）と「与える運動」（または「助け合う運動」）の二つの型に分類し、社会運動史の中に位置付けている〔伊藤 2012:132-134〕。彼によれば、1960年代から70年代の初頭にかけての時期には主にデモによる「抗議する運動」が特に大きな盛り上がりを見せたが、世界的には70年代後半（日本では80年代半ば）から90年代にかけての時期に主にボランティアなど、「助け合う運動が」活発になった。また、「抗議する運動」は60年代になって初めて生まれたわけではなく、労働争議などのかたちで近代以降大規模な「抗議する運動」が行われてきた。

1990年代以降、社会運動を取り巻く状況には以下4点の大きな変化が生まれたと長谷川、町村は指摘している。第1に、高度成長期に資源再配分や規制に関し大きな権限を持っていたため、政府は社会運動の主要なターゲットでありえたが、政府はしだいに財政を通じた介入を縮小させ、政府自体のあり方が変わったため、社会運動は活動の対象である「政治」の意味を考える必要に迫られたこと。第2に、日本の市民運動は国際的な東西対立や、国内の保守革新のイデオロギー対立などの間で、どちらかだけに与するのではない「第三の道」を模索することに価値を見出していたが、

その大きな対立が弱まったことで、そのニッチがなくなってしまったこと。第3に、従来の市民運動自体の閉鎖性が明らかになったこと。市民運動の行為者からマイノリティはあまり包摂されていなかったことがわかり、その後エンパワーメントという方向へ社会運動が進展した。第4に、社会認識における心理主義化の傾向が強まる中で、社会問題がより個人化された形で定義される度合いが増し、したがってその解決手段もセラピーや自己啓発という形をとりながら個人へと内向した [長谷川・町村 2004:11-13]。このような文脈にもとづく社会運動は、一般に「新しい社会運動」と呼ばれ、そこでの中心課題はかつての組織された労働運動とは違う。ジェンダー、生態系への関心、身体の快感や自らのアイデンティティ領域に関わる、個人のライフスタイルと生の意味を賭して人々は社会運動に向かう [井上 2002:126]。「新しい社会運動」は近年の社会運動における大きな潮流となっている。

(2) お祭りデモと占拠デモの隆盛

従来の「抗議する社会運動」は、労働運動や国家と企業が引き起こした公害に対抗する、メンバーシップがはっきりとしたものだった。「新しい社会運動」の時代を経て、2010年代には「お祭りデモ」 [伊藤 2012] と表現されるような、一見荒唐無稽な社会運動が活発化してゆく。2011年の4月に高円寺に「反原発」を訴えて集まったおよそ1万5000人の若者たちのデモは従来の抗議運動と様子が異なっていた。数ブロックに分かれて進むデモ隊を先導していたのは近年一般的になりつつある「サウンドカー」と呼ばれる音響機材が積まれた小さなトラックであり、デモ隊の面々はダンス・ミュージックに合わせて「踊り狂って」いた [伊藤 2012:22]。このようなデモはこの時期頻発したが、マスメディアによって大々的に取り上げられることは稀であった。伊藤はその理由を、メディアの側もこの抗議運動は「真面目な運動」なのかわからず、どう受け止めてよかったのかわからなかったのではないかと分析する [伊藤 2012:22-27]。

その後、反原発デモは回数を重ねていく中で各地に広がり、抗議運動に集まる人数も大規模なものになった。ソーシャルメディアの使用が原子力発電の撤廃という共通の目標を持った人びとの中隊を可能にし、首都圏反原発連合主催の官邸前デモではその抗議参加者がツイッターを利用した運動の情報共有がスタンダードになっていった [野間 2012:122-127]。

毛色が違うように見えるこれらのデモは路上や公園を占拠してお祭り騒ぎを繰り広げ、祝祭的空間を構築するという観点ではオキュパイ・ウォールストリートと共通性があり、「占拠デモ」の文脈に連なる [伊藤 2012:46-70]。2011年9月にはニューヨーク市ズコッティ公園を「反格差」を訴えた若者たちが陣取り、その場から立ち去ろうとせず、水と食料が運び込まれ、2ヶ月近くにわ

たって公園を占拠し独自の共生空間と自治空間を創造した〔伊藤 2012:46-48〕。このような場は社会運動の文脈で「一時的自律ゾーン(TAZ: Temporary Autonomous Zone)」と呼ばれる〔伊藤 2012:68-69〕。伊藤の要約を示すと以下の通りになる。

現代の社会運動は 歴史を形づくるための場ではなく、むしろ歴史から逃れ出るための場である。そこでなされるのは持続的な制度改革を目論む「革命」ではなく、一時的な至高体験を目指す「反乱」だ。それは時間と空間の中の特定の領域を一時的に占拠し、そこでほんのつかの間、陽気なお祭り騒ぎを繰り広げたのち自ら姿を消し、消滅する。そして別の時間と空間の中のどこか別の場所に再び立ち現れ、決起する。そうしたゲリラ戦の広がりとして展開されるのが現代の社会運動である。

SEALDs をはじめたメンバーのうちのごく少数は、本格的な社会運動やデモをはじめる前に TAZ という名前をそのまま使い、若者たちが集まって官邸前での反原発抗議運動を見に行き、デモやりはじめることについて話し合った〔奥田 2016:92-94,116-129〕。やがて SEALDs として安全保障法制の抗議運動の結節点として機能する若者たちは、日本国内の、ひいては海外の社会運動の影響を受けつつ、自分たちの運動を模索する。

し
りたふー

第3章 SEALDs の抗議運動

1. 概況

筆者はこの節において、SEALDs の運動を組織としての論理に沿って位置づけ直すために、便宜的に大きく三つのフェーズに分類し、その抗議運動の流れを記述する。

(1) SASPL から SEALDs 初期 抗議スタイルの模索

SEALDs の参加者たちのうちの多くは安全保障法案に対する抗議行動を展開する以前、SASPL (サスプル: 特定秘密保護法に反対する学生有志の会) として新宿を皮切りにサウンドデモを行っていた。学生たちにとって SASPL でのデモは最初の抗議行動であり、「デモの告知はフェイスブックとツイッター、そして LINE や大学での口コミ」[奥田 2016:138] であり、その様子も SEALDs の頃とは少し毛色が違った。軽トラックの荷台をステージとして設営し、その上でスピーチをするというスタイルは SEALDs の街宣でも継続するが、この当時はギターの弾き語りや音楽に合わせて踊る様子も見られ、伊藤が言う「お祭りデモ」の影響を受けていた。

抗議終了後はクラブを貸し切り、アフターパーティという名の交流会兼勉強会が開かれた。この場にいた人びとは SASPL の学生の高校時代の友人たちや知人が多く、ほぼ全員が「友達の友達」という距離で結ばれる関係であった。手作りのスープが振る舞われ、アットホームな雰囲気の人びとは交流し、社会に対して思うところをぶつけあった。SASPL は路上でサウンドカーを用いた抗議行動を三回と官邸前抗議を一度行った。2014 年 10 月 25 日、三度目の抗議行動では、2000 人規模の人を集めた [奥田 2016:147]。これらの抗議行動を路上で目にした人や友人づてで参加した人たちがメンバーに加わり、世代や大学も広がっていった [奥田 2016:148]。同年の 7 月 1 日、SASPL の二回目と三回目のデモのあいだに安倍内閣による集団的自衛権の行使容認のための閣議決定が行われた。これをうけて、SASPL のメンバーたちは「特定秘密保護法の問題とは無関係ではない」[奥田 2016:148] と考え、SEALDs を構想する。そのときの状況を奥田は以下のように述べる。

(中略) シングルイシューを超えた動き方が必要になること、そして来る戦後 70 年の年に

行われようとしている安保法制の改正、そして、改憲がかかった 2016 年の選挙に向けて行動をしなければならない（当時ダブル選挙と言われていた）と考えていた。また、この時に起こった官邸前の抗議で集团的自衛権に反対する様々な団体と繋がったことも、SASPL が SEALDs につながるひとつの要因だったかもしれない [奥田 2016:150]。

このような文脈において、SEALDs は立ち上げられるに至った。しかし、SASPL のときには 150 人が参加した LINE グループがあったが、SEALDs 立ち上げのときのミーティングに実際に参加したのは 4、5 人であった [奥田 2016:158-159]。「次はデモじゃないものがしたい」というメンバーの強い以降があり、勉強会やシンポジウムを定期的に計画した。また、メンバーたちは SEALDs の所期の目的を 2016 年に行われるだろうと言われていた衆議院参議院同時選挙を目標にして、立憲主義、安全保障、生活保護をテーマし「リベラル勢力の結集」を呼びかけて発足した [奥田 2016:159]。SEALDs は改憲を行った上で政権は安全保障法制を変えてくるだろうと見込んでいたところ、2015 年 5 月 13 日に改憲の手続きを行わずに法案を閣議決定するというニュースが流れた。奥田は「あんまり腹たつから官邸前で抗議したい」とつぶやき、SEALDs の公式アカウントでもその夜抗議を行うとつぶやいたところ半日もたたずに数百リツイートされ、その夜官邸前には 2000 人近い人びとが集まった [奥田 2016:162]。デモはあまり行わないつもりでいた SEALDs のメンバーたちは、これを期に国会前へ抗議の場所を移しつつ、毎週金曜日国会前で声を上げ始めた。

(2) SEALDs が抗議運動の受け皿の役割を果たした時期

8 月 30 日に 10 万人を集めた国会前抗議も、最初は 1000 人や 2000 人の規模から徐々に参加者を増やしていった。SEALDs は 5 月から法案が採決された 9 月 18 日まで、抗議を行う各ステークホルダーや、法案の制定過程とその内容について反対する人びとの「受け皿」、つまり抗議する場の構築という機能を果たした。SEALDs は SASPL を踏まえた長い社会運動のキャリアを有することで、社会的な知名度も高く、運動のノウハウも獲得していた。富永は社会運動キャリアを持つ組織の傾向として、「財団や法律家との交渉技術や資金といった資源の利用が可能になり、その資源こそが他組織との連携を可能にする。一方でこうした資源は「組織」に固有のものではなくむしろ個人が所有するものとしてとらえることができる」[富永 2016:139] と論じている。国会前に集まった人びとは共通の問題意識によって連携関係を構築し、政治的な意識を深め、戦略や情報を交換するだけでなく、ともに抗議運動といったイベントを実施する。

SEALDs では中心メンバーの数人がこのようなカウンターパートとの交渉役として仕事をした。

7月の終わり頃からは、「安保法制に反対する学者の会」や「立憲デモクラシーの会」など、日本の著名な学者が名を連ねる団体ともデモや集会を共同で行うことになった〔奥田 2016:189〕。この法案の制定過程では、1万人を超える学者が反対の声明を出した〔奥田 2016:190〕。

8月30日以降の国会前抗議では、10万人以上が参加し、同日に日本各地で開催された安全保障法制に対する抗議運動の人数も合わせると30万人以上が抗議した〔奥田 2016:191〕。この頃からSEALDsは様々な団体と本格的に共同して行動するようになるが、はじめは既存の市民運動や労働組合の人たちには受け入れてもらえていなかった〔奥田 2016:191〕。

9月10日「採決」の予定であった法案は市民の抗議によって遅れ始め、国会の会期を考えると18日が最後の攻防になることが次第に明らかになった〔奥田 2016:213〕。この18日を越えれば法案は廃案になるかもしれないという話も当初は出ていた。奥田はこのときのメンバーたちの状況を「抗議が終わっても自宅へは戻らず、ミーティングを重ね、近くのサウナみたいところで風呂に入り、そして早朝だろうと深夜だろうと時間なんか関係なくかかってくる電話を無視しながら、合間を縫って仮眠し、起きてそのまま国会前に行く日々」〔奥田 2016:213〕と表現している。9月18日から日付が変わった19日、法案は可決した。19日もSEALDsは国会前で抗議を行った。

(3) 選挙運動への移行から解散

安全保障法案を「本当に止める」ことを達成できなかったSEALDsは、その演出の能力と市民の社会的・政治的ニーズを解釈する能力を活かし、政治理念を共約することのできる候補者を当選させるため、政党候補者の政治キャンペーンを行い始める。以下、抗議運動から選挙運動を行う組織へと性質を変える過程を記述する前に、SEALDsはどのような演出や自己表象を行ったのか、また、この時期の組織像を示す。

若者の社会運動として、SEALDsはメディアでセンセーショナルに取り上げられ、毎週金曜日に国会前で抗議を続けることで法案に反対する全世代の人々の運動の受け皿として機能した。SEALDs筆者の知人は、SEALDsの抗議運動を見に言った感想として、筆者に「若い人がいなかった」と告げた。フロントステージとしてのSEALDsはメンバーをデモの中心に固めて「絵作り」をする。そのため、中心のメディアによって表象されるのは抗議運動の参加者全体の中では「少数派」のSEALDsメンバーであった。また、交通整備やデモの秩序を保つのもSEALDsメンバーであり、テレビで報じられる「SEALDsの抗議運動」の参加者の大多数はSEALDsメンバーではなかった。(対照的な例として、SEALDsが呼びかけ団体の一つになっている組織である市民連合⁽³⁾では全世代的な絵作りをしている。)

SEALDs の抗議運動のバックステージでは、その大多数が若者であった。ミーティングに三十代以上の人が混ざることにはほぼなく、もし法務関係や SEALDs を撮影する役割としてミーティングの場においても、話の内容に口をはさむことはまずない。SEALDs は海外・国内を問わず、メディアを頼って情報を発信するために記者会見をしばしば行った。

SEALDs が裏方として選挙キャンペーンを行った候補を二人あげる。一人は 2016 年 4 月に北海道第 5 区の衆議院補欠選挙に立候補した当時無所属で現在は立憲民主党所属の国会議員である、池田真紀である。もう一人は、同年 7 月に参議院選挙に立候補し当選した、民進党の小川敏夫である。

池田真紀に関しては、一部の SEALDs メンバーたちが北海道まで足を運び、東京で作成した補欠選挙を周知し、投票率を向上させるためのパンフレットの配布や、SEALDs としての存在感を前に押し出さない演出での、街路での投票呼びかけを行った。

小川敏夫は東京から立候補したため、SEALDs メンバーが実際に政党の選挙対策委員会に入り、演説時の演出や、投票を呼びかける電話かけを行った。池田は惜敗したが、小川は当選し、現在民進党の参議院議員会長としての役目を果たしている。これらの選挙運動の様子は SEALDs のドキュメンタリー映画、「わたしの自由について ~SEALDs 2015~」の DVD 版特典映像に詳しい。この後、2016 年 8 月 15 日に SEALDs は解散した。

2. SEALDs に対する言説

SEALDs の運動の意義やスタイルに対する言説の中で、SEALDs の学生たちがいかに「普通」で、それなのに社会的にインパクトのある運動ができたということを褒めそやす記事が多くあった。このような表象に対して、富永は以下のように疑義を呈している。

この本の元となった博論を書くのと同じ時期くらいに、SEALDs を中心とした現象が起きました。この本を書いたときまで、私は社会運動をやっている人たちが、どこか特殊な経歴を持っている人たちだと思っていたんですね。たとえば生い立ちであるとか、出た学校であるとか。そういったことを考えた時に、政治に無関心だった「普通の人」が運動を始めたというのは、ある意味衝撃的でした。ただ、どこかで、この人たちもコアメンバーはいわゆる普通の人ではない、という確信もあったんです。事実、話を聞いてみるとリベラルな教育を受けていたり、親御さんが社会運動をやっていたりするわけです。

ただ、その人たちの「普通性」みたいなものを、評論家や年長で昔運動をされていた方たちが、こぞって褒めそやした。それはある意味で、すごく問題というか。結局、コアには彼らに

固有の家族体験であったり、学校体験などがある。そういった個人的な背景みたいなものもあるにもかかわらず、「社会運動は正義のための運動で、普通の人たちが共感すべきもの」という考え方に覆い隠される。本来は別のところに原因があるかもしれない物事を、外野はなかば都合よく解釈します。それは今回のような運動参加者に対するバッシングに行き着くような気がします。それでやっぱり社会運動はそれまでだとすると、もう過去の社会運動をめぐって起きた出来事と同じですからね⁽⁴⁾。

社会運動を過去行っていた世代が、「普通の若者」が変わってきたという希望を SEALDs に見出し、押し付けることは結局 SEALDs を苦しめることになる。なぜなら、SEALDs の運動は同世代から「広い支持を集めた」とは言いづらいものであり、年長世代に比べ同世代への訴求力には課題を抱えていた [大澤 2016:337-352]。大澤は、「SEALDs の参加者たちは、自らの主張に、民主主義、立憲主義、九条、平和主義、戦争反対、個別的自衛権とかといった主張に普遍的に妥当する正義があると直感している。それに対して、貧困な若者たちは、自分の要求に、すべての者にとって有意義な普遍性があるとは思っていない。それは切実であり、かつ当然の要求ではあるが、しかし、自分の個別の利害の問題だと感じられているのではなかろうか」 [大澤 2016:350] と仮説を立てた上で、SEALDs の主張がこのような若者たちには一種の趣味の問題、それぞれに固有の価値の表出として捉えられてしまい、貧困世代を含む若者の多くはデモの主張のなかに自分たちが代表されていると感じることができなかったのではないかと考察している [大澤 2016:351]。

SEALDs の主張や抗議の様子を、大澤のいう「貧困な若者たち」がどれだけ体験することができていたかわからないが、抗議運動に馴染めない若者たちは確実に存在した。

一方で、SEALDs の参加者の目線から、自分たちのある意味変わった共通の文脈に気づく例を挙げる。筆者は SEALDs のコアメンバーの二人と明治学院大学白金キャンパスで会話をしていた際、「藤木くんは家族とかどんな感じなの？」というような質問をされたため、筆者の親類も社会運動の経験があるという旨のことを伝えと、一人はやっぱり！と笑いながら納得したような反応を見せていた。SEALDs のメンバーには社会運動とそもそも身近、または理解がある環境で育った若者が一定数いた [富永 2016:142-163]。ある意味で SEALDs のメンバーは社会問題に巻き込まれた主体として、周囲の大人に理解される経験と、友人たちからは理解されないという経験を共有していた。

このやりとりからは、自分たちがは共通してどんな人びとなのか、SEALDs という場に参加してきた人びとはどんな経験を共通して持っているのかということに関する関心があると推測できる。

SEALDs の「他人に期待せず自分でやる」というスタンスがあり、この背景には同世代から理解されてこなかった経験、運動をすることに対して周囲からの違和感の表明にぶつかって苦しんだ、この運動に参加した人々が共通して経験したトラウマであったのではないか。富永のインタビューの中にも同様の場面が見られる。[富永 2017:] もしすでに理解されていたら、そのような土壌が社会にあったとすれば、安全保障法制が通ってしまおうとしたときに抗議を始めたのは SEALDs ではなく べつ の名前を掲げた若者たちだったかもしれない。

SEALDs の抗議活動において、抗議の場に参加を呼びかけるメッセージと実際に足を運んだ友人たち。友人や親しい間柄の人をデモの場へ誘うのはしばしばみられる出来事であった。筆者の周囲の事例になってしまうが、SEALDs に直接の知り合いがいなくても、あの抗議の場に足を運んだ筆者の知人はいま把握しているだけでも二十人程度いる。この人たちはなにを考えたか。何人かは筆者と抗議運動の現場で連絡を取り合い、その場やデモ後のアフターパーティで SEALDs のメンバーを交えて会話することもあった。SEALDs と交流するというよりは、デモの様子をじっと眺め、その場で発される抗議の声と身振り、動きを体験したあとに、SEALDs のメンバーとして仕事をすることは選ばない友人たちもいた。SEALDs と主張や問題意識は共有していても、抗議の声を共にあげる、ということや怒りをあらわにするということを行わない友人たちは積極的に SEALDs の抗議空間への参加を呼びかけることはなかったが、ゆるやかなかたちでこの抗議運動に連帯していたと筆者は考える。実のところ、デモの中のサイレントマジョリティはこのような人たちだと考えることができる。

なぜ同世代は気軽に声をかけることが難しかったのか。それは、SEALDs の活動に共感している同世代が SEALDs と関わりをもってしまうと、SEALDs のことを理解しているあまり、SEALDs として行動していない自分と行動している SEALDs を峻別するものがなくなってしまう、彼らに同調せざるを得なくなってしまうおそれがあることだと筆者は考察する。事実若者の社会運動として自らを表象していた SEALD は、同世代の協力を求めていた。

SEALDs は「若者の社会運動」と自己を表象し、かつマスメディアをはじめとする他者にもそのように表象される道を選ぶことによって、社会に大きなインパクトを与え、センセーショナルな取り上げ方をされたことで特に SEALDs よりも上の世代に強い求心力を発揮し、結果的に十数万人を国会前に集める受け皿になることができた。

SEALDs の参加者たちは抗議空間の外でも活動を行っていた。それぞれの出身地や大学がある地方で、市民団体が主催するイベントや、マスメディアと連携した討論集会なども行っていた。実際には、SEALDs に参加した若者たちが各地で「SEALDs の〇〇」という肩書きの下に行ったイベン

トをすべて把握している人間は SEALDs の中にもいない。

3. 政治局面に与えた影響

2015 年 6 月 27 日、渋谷ハチ公前での街宣で SEALDs は初めて政治家を抗議の場に呼んだ。これは現在の野党共闘に繋がって行くが、当時各野党の政治家に連絡をとった奥田は以下のように振り返る。

まず SEALDs のツイッターやフェイスブックのアカウントをフォローしていた国会議員や市議会議員の人に、この日に来てくれないか、と連絡をとった。社民党は党首のメッセージを、市議の佐藤あずさんが代読する形で参加することになり、生活の党からも山本太郎さんが来ることになり、共産党はなんと党首の志位和夫さんが来てくれることになった。

難航したのは維新の党と民主党だった。民主党には幹部クラスの議員に来てほしいとお願いしたが、なかなか上手くは進まなかった。ずるずると日が過ぎてしまう中で、たまたま安保法制の勉強会で小西洋之議員に会い、説明すると「ぜひ」と言ってくれて、来てもらえることになった。共産党だけ党首が来ると、対外的に見てあまり良いアピールにならないだろうと思った。そこで、元総理大臣の菅直人さんにダメ元で連絡してみた。すると意外にも、快く引き受けてくれた。維新の党からも初鹿明博議員がギリギリのタイミングで来てくれることになった [奥田 2016:171-172]。

このとき、街宣車の上で議員たちが手を取り合うが、初鹿明博議員は志位和夫氏に手を握られるのをためらいつつ、両手を頭上に掲げた⁽⁵⁾。ここからは当時の政党間の微妙な緊張関係を垣間見ることができる。野党共闘は 2016 年の参議院選挙、2017 年の衆議院選挙と継続し、政局を左右するアクターとしての役割を發揮している。

また、池田真紀氏と小川敏夫氏の選挙キャンペーンの経験を踏まえ、立憲民主党のプロモーションでは以前 SEALDs として活躍していた人びとがその演説やソーシャルメディアでの広報戦略の手法を伝えた。立憲民主党のツイッターアカウントのフォロワー数は 18 万 4000 を越え⁽⁶⁾、この数字は日本の政党のアカウントの中で最多である。

第4章 考察

1. 民主主義を問う運動

「民主主義ってなんだ」「これだ!」というコールアンドレスポンスが SEALDs の抗議運動の中で唱えられる主要な言葉の一つであったが、民主主義を模索することは SEALDs の主要なテーマの一つであった。

千葉は 18 世紀末にアメリカ連邦憲法の批准をめぐって行われた「フェデラリスト」対「アンチ・フェデラリスト」論争を踏まえ、18 世紀末の時点では民主主義は直接民主主義として厳密に捉えられていたという事実を確認し、厳密に言えば代表者による委任統治的な寡頭制の一形態である代議制民主主義と、民衆の直接参加と自治を中心にした民衆の自己統治の一形態である直接民主主義を対比させる [千葉 2000:iv-v]。SEALDs の中心メンバーたちは小説家の高橋源一郎氏と幾度か民主主義についての討議を行っており、それぞれの個人が抗議運動やデモを民主主義の文脈の中で位置付けている [高橋・SEALDs 2015:194-197]。運動を展開して行く中で、SEALDs は市民社会に対して、民主主義や安全保障法制を熟議する機会を創出した。

憲法学者の本は、毎週行われた国会前の路上の抗議運動がその頻度と規模を拡大し、飛躍的に参加者が増大するとともに全国の各地へ伝播していく過程で、議会では議論が停滞状態にあったことの対抗機能として位置付けられる、「市井の人びとの熟議」という非制度民主主義を SEALDs の抗議運動が喚起したことを以下のように評価する。

デモなどの非制度的民主主義は、それ自体としては制度的民主主義の決定に影響を及ぼさず、その効果を疑問視する向きもあった。しかし、安保関連法案の審議過程においては、街頭宣伝やデモに日常的に国会議員が参加し、そこでの民意に後押しされて国会内で論陣を張り、それがまた非制度的民主主義へとフィードバックされるという循環が生じた。とりわけ法案審議の最終盤には、国会の内と外でいわばシンクロ現象が起こり、国会前の声に鼓舞された野党議員の踏ん張り、国会内では圧倒的な数を誇る政権与党をかなりのところまで追いこんだ。これは「新たな民主主義」の成果として特筆すべき事柄といえよう [本 2016:33]。

代議制民主主義において、憲法という本来国家を縛る法を代議士が恣意的に解釈し、安全保障法制を可決するような民主主義の危機的状況においては、路上における抗議運動や熟議の重要性は増大する。同様に憲法学者の奥野も SEALDs の抗議運動を以下のように評価する。

2015 年 6 月以降、「安保関連法案」に反対するデモや集会といった直接行動が、国会周辺はもちろんのこと全国津々浦々にて、空前の規模で展開された。これら直接行動は、それに参加する者を勇気づけそれぞれの主体的意思形成を促すとともに、参加していない者に問題の深刻さを訴えるという点で、国民間の熟議に大いに寄与したはずである。またこのような直接行動が、国会論戦に触発されて理論的にも実践的にも発展し、また直接行動が政党や議員を励まし圧力をかけたという点では、国民と議員・政党とのつながりを強め、熟議を促進したといえるであろう [奥野 2016:71]。

抗議運動は問題の深刻さを感覚的に知らしめ、人びとが社会問題を認知するフレームを変えることに関して大きな役割を示す。文字通りのデモンストレーションとして SEALDs の抗議活動はメディアで大きく報じられ、市民社会に安全保障法制について熟議をする訴求力を発現した。

2. 結節点としての多義的な機能

SEALDs の社会運動としての卓越性は対外的ステークホルダーとの連帯にある。政治局面においては野党共闘という政党を連帯させる能力である。抗議運動においては第 3 章 2 節で見たように、異世代の間で行動する若者の象徴として捉えられ、主に年長世代に対して抗議運動へ連帯する求心力としての力を発揮した。

SEALDs はその戦略的な自己表象によって、若者の社会運動として同世代の若者たちからも注目を集めた。2015 年 8 月 30 日、SEALDs は安全保障法案の可決に疑義を呈する同世代の市民組織とともに記者会見を行い、そのまま国会前で抗議運動を展開した。

本稿では SEALDs が同世代に対しては、年上世代よりも訴求力を発揮しなかったと考察したが、これは限られた時間と法案を止められるか否かという逼迫した状況に直面し、なし崩しのリーダーシップのもとで時間をかけて同世代を巻き込むよりは、同様の達成目標を共有する運動主体との連帯を SEALDs の参加者たちが、選びようもなく選んだと筆者は主張する。同世代に対してはサロンという社会問題について討議し、知識を交換する場や、個々人が大学や職場で時間をかけて理

解を得ていった。個人にとってデモというシンプルな表現は、意思表示の回路の不在を克服するものである。たしかに言論や表象で意思表示はできるが、能力や条件、立場からそれらができないひとにとって、匿名の人間として抗議運動の現場に足を運ぶことは、公共空間への参加のたしかな選択肢の一つである。筆者は SEALDs とともに関係がなかった十数人の友人たちと、国会前で偶然、または連絡を取り合って会い、抗議の対象である法案に対して意見を交換し合う機会に恵まれた。

第5章 結論

1. SEALDs は現実の政治状況をどう変えたか

SEALDs はその主要目的の一つであった、安全保障関連法案の成立を「本当に止める」ことは達成できなかった。しかしながら、野党共闘という、政局を大きく左右する状況をつくるきっかけを提供した。東京、北海道での選挙運動の経験を踏まえ、立憲民主党の選挙アピールの演出についても力を発揮した。立憲民主党は、「ボトムアップ・デモクラシー」や「路上から生まれた政党」という文言を、自らの性質を表現するためにスピーチの際に用いる。

国会前の抗議運動の文脈だけで捉えられがちな SEALDs であるが、所期の目的として衆参ダブル選挙において、理念を共有する政党の議席を獲得することを掲げていた。選挙のスタイルをソーシャルメディアにおいても、立憲民主党に代表される路上のスピーチのスタイルにおいても、SEALDs は現実の政治状況、選挙自体を市民の側に引き寄せた。

2. SEALDs は社会運動をどう変えたか

一部メディアによって SEALDs の社会運動のスタイルは新しいと表象されたが、SEALDs は高円寺発祥のサウンドデモや反原発金曜官邸前デモ、そしてオキュパイ・ウォールストリートの運動に見られた、ソーシャルメディアというテクノロジーの活用やサウンドデモ、官邸前や国会前という場所における祝祭的な空間や自律空間の構築といった観点を踏まえて考えれば、手放して新しいと褒めそやせずことでその独自性や卓越性を把握することができなくなってしまう。

社会運動は発展論で論じた場合に見失うものが多い。富永の分析が SEALDs 参加者を傷つけたのは、それが社会運動の歴史に対して理解があるあまりに、社会運動の一回性を軽視してしまったことにある。SEALDs の「社会運動サブカルチャー」についていけない人びと、組織、運動は別のありかた、別の名前、別の場所、別の方法でそれぞれ抗議運動を展開していた。年齢やスタンス、カルチャーが違って抗議運動というイベントの場であれば、連帯し問題に向き合うことができた。

抗議の声が怖いという意見は聞かれたが、実際にデモの現場に行ってみると、ゆっくり休んでいる人、本を読んでいる人、コールに対して反応はしないが、抗議運動全体の音聞き、何かを考えている人などを多くみることができる。

SEALDs を社会運動サブカルチャーとして捉え、そのふるまいやこだわり、ある種の排他性を理解し、表現したことは大きな意義があるが、SEALDs が直面していた状況を鑑みると分かり合えなさに留まる分析は限りある資源を尽くし運動した参加者にとっては残酷なものになりうる。

3. SEALDs は人びとをどう変えたか

SEALDs メンバーの寺田ともかは「完璧な運動体はめざしていませんでした。SEALDs がやってきたことは、誰かに期待せずに自分でやるといったことでした。⁷⁾」SEALDs の解散会見の際に述べた。私はこのメッセージの背景に、SEALDs の面々が体験した苦勞を見透かさずにはいられない。期待して待っているだけでは何も変わらない状況を SEALDs は打開した。

抗議運動の展開の中で、日本各地で SEALDs と連帯し、または連帯せずに抗議運動を展開する人びとが増えていった。抗議運動に関するアクターのマジョリティは、実際に運動の現場に身を置く置かないかは問わないが、抗議をいかなる形かで見ている人びとであった。4 章でも述べたが、市民社会に安全保障法制、民主主義、憲法解釈という 이슈 を討議の課題として SEALDs を中心とする運動は持ち込んだ。民主主義は未完のプロジェクトである、と SEALDs のメンバーは表現する。自分とは異なる人びととの共約可能性をどう模索するか SEALDs は人びとに訴えた。

注

- (1)抗議運動の参加者数の発表者は、大きく三つに区分できる。まずは主催者発表。次に報道機関の発表。最後に警察の発表である。警察は対外的にデモの規模を公式に発表しているのではなく、ある一瞬においた最大の人数を推計し、どの規模で警備の動員が必要かという観点を示すために数字を明示する。そのため、ある抗議運動を、一日でどれほどの数の人々が入り出したのかという観点での把握には即さない。また、抗議運動中の動的な人の動きを測定することの困難と実情については 2012 年の原子力発電再稼働に反対する金曜官邸前デモに詳しく記載されている[野間 2012:115-120]。抗議運動の最中にその参加者を計測するために多くのスタッフを動員することは現実的ではないため、主催者発表の数値はおおよそその目算で行われる。一方で、警察発表に関しては、記者がなじみの警官に参加者人数を聞いたものをそのまま発表している場合もある[野間 2012:120]。
- (2)「「社会運動サブカルチャー」の正体（立命館大学准教授・富永京子インタビュー）」honierge 記事 <https://honicerge.jp/articles/interview/211>（2018/01/13 参照）
- (3)正式名称「安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合」市民連合ウェブサイト <http://shiminrengo.com>（2018/01/16 参照）
- (4)(2)に同じである。
- (5)映画「わたしの自由について ～SEALDs 2015～」DVD 版特典のオーディオコメンタリーにて、中心メンバーたちがこの時の志位和夫氏と初鹿明博議員の様子を詳細に語っている。
- (6)2018 年 1 月 16 日現在。
- (7)映画「わたしの自由について ～SEALDs 2015～」DVD 版特典ディスクより。

参考文献

千葉 眞

2000 『デモクラシー』岩波書店。

五野井郁夫

2012 『「デモ」とは何か 変貌する直接民主主義』NHK 出版。

ハーバーマス、J.

1994 『公共性の構造転換 ——市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞

雄・山田正行訳、未来社。(Jürgen Habermas, 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit:*

Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft. Frankfurt am Main : Suhrkamp Verlag.)

長谷川公一・町村敬志

2004 「社会運動と社会運動論の現在」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口

直人編著『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』pp.1-24、
成文堂。

樋口直人・稲葉奈々子

2004 「グローバル化と社会運動」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』pp.190-229、成文堂。

井上芳保

2002 「対抗的社会運動とルサンチマン処理文化」野宮大志郎編著『社会運動と文化』pp.103-134、
ミネルヴァ書房。

伊藤昌亮

2012 『デモのメディア論 社会運動社会のゆくえ』筑摩書房。

川北 稔

2004 「社会運動と集合的アイデンティティ ——動員過程におけるアイデンティティの諸相——」
曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著『社会運動という公共空間——理論と
方法のフロンティア』pp.53-82、成文堂。

本 秀紀

2016 「民主主義の現在的危機と憲法学の課題」『グローバル化時代における民主主義の変容と憲法学』pp.12-43、日本評論社。

野宮大志郎

2002a 「社会運動と文化 ——なぜ運動の「文化」的研究なのか——」野宮大志郎編『社会運動と文化』pp.1-26、ミネルヴァ書房。

2002b 「社会運動の文化的研究の課題 ——その問題とこれから——」野宮大志郎編『社会運動と文化』pp.193-213、ミネルヴァ書房。

小熊英二

2012 『社会を変えるには』講談社。

大石 裕

2002 「拡大する「政治」と社会運動論 ——「文化」のインパクトを中心に——」野宮大志郎編『社会運動と文化』ミネルヴァ書房。

大畑裕嗣

2004 「モダニティの変容と社会運動」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』pp.156-189、成文堂。

大澤真幸

2016 『可能なる革命』太田出版。

岡野八代

2009 『シティズンシップの政治学〔増補版〕——国民・国家主義批判』白澤社。

齊藤純一

2000 『公共性』岩波書店。

曾良中清司

2004 「社会運動論の回顧と展望」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』pp.230-258、成文堂。

高橋源一郎／SEALDs

2015 『民主主義ってなんだ？』河出書房新社。

田村貴紀・田村大有

2016 『路上の身体・ネットの情動 ——3.11 後の新しい社会運動：反原発、反差別、そしてSEALDs』青灯社。

富永京子

2016 『社会運動のサブカルチャー化——G8サミット抗議行動の経験分析』せりか書房。

2017 『社会運動と若者 日常と出来事を往還する政治』ナカニシヤ出版。

東條由紀彦・志村光太郎

2013 『討議——非暴力社会へのプレリュード』明石書店。

渡辺 勉

2004 「社会運動のフォーマルモデル ——政治的機会構造のメカニズム——」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』pp.115-155、成文堂。

山本英弘・西城戸誠

2004 「イベント分析の展開 ——政治的機会構造論との関連を中心に——」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』pp.83-114、成文堂。

Summary

Protesting Social Movement

—What have SEALDs changed?—

SEALDs (Students Emergency Action for Liberal Democracy-s) appeared in 2015 and played a leading role in protesting against establishment of new Japanese military legislation by Liberal Democratic Party. This change made it possible for Japan Self-Defense Forces (JSDF) to operate overseas for collective self-defense for allies. In conventional interpretation of Japanese constitution, JSDF had to observe exclusively defensive security policy. Therefore, most constitutional scholars and the intellectuals raised doubts about the bills. From this context, SEALDs has created places for people who want to protest. The aim of this article is clarifying what SEALDs have changed through this movement. The outcomes are broadly divided into three perspectives. This movement changed political landscape, social movement so far and people.

First, SEALDs actually did political campaign for candidates aimed to the Upper House election. Also, in June 27, 2015, the students carried out political campaign on the streets of *Shibuya*. This event became the trigger of the joint struggle of the opposition parties leading to now. Moreover, Aki Okuda, one of the leaders of this movement gave speech members of the Diet in upper house as a public view on security bills. This social movement has been held not only in front of the Diet but also the inside.

In terms of social movement, this article revealed that SEALDs inherited the style of protest from Japanese anti-nuclear plant demonstration and Occupy Wall Street. Also, SEALDs gave the chance of deliberation on the security bills, democracy and constitution. Based on the above, SEALDs have changed democracy as uncompleted project.

謝辞

私は真剣である以上に深刻にこの抗議する社会運動というテーマに向き合ってしまう、周囲の人たちに心配をかけてしまうことがありました。公共性論や市民社会論から SEALDs を理解しようとする私の無謀な構想を、関根先生は社会運動論で考えるべきだと指導してくださりました。考え込みがちで危なっかしい私を寛大な目で見守っていただき、本当にありがとうございます。ご心配をおかけして申し訳ありません。

ゼミ生のみんなは筆者の混乱がそのまま出て来たような構想発表に対し、建設的な意見を粘り強く提示し、不明な点をつねに糾してくれました。私は快活でよく遊び、よく学ぶ関根ゼミが大好きです。関根ゼミの学生として二年半に渡って学問ができた経験は、これから生涯をかけて発展させ、地道に表現し、活かしていきます。いままでありがとうございます。

のちに SEALDs を始める人たちに会ったときの衝撃はいまも忘れていません。いつかまたどこかで会える日を楽しみにして、筆を置くことにします。